

【優秀賞】

## 脱米論

### —ある米国帰りの帰国子女の意見—

(有)クリエイティングコミュニケーション  
ケーションズ 取締役副社長

杉山 大輔 (25)

はじめに

本当の国際的なものの考え方とは、自分の母国を理解しその文化を他の国々と比べるとということから始まる。これは私が父の転勤のため三歳から中学三年までの一三年間を米国のニューヨークで生活し、また帰国してから日本という単一民族国家である自国でこれまで一〇年過ごして得た考えである。現在の私は、

海外での生活があればこそ存在する。

二一世紀を迎え日本は混乱している。小泉政権はブッシュ政権に追随し、アメリカの言いなりになっていると言っても過言ではない。これまで日本と諸外国の間には様々な問題が起こったが、それらの大半が、「日本」が国際社会の中で自らの立場を明確にしていけないことが本質的な原因になっている。第二次世界大戦後、物理的な意味での混乱期を脱し高度に発達した経済社会を形成し得たつい最近まで、日本の父親たちは、家庭を顧みず仕事に没頭した。日本を経済的に再生させること、荒廃した日本を普通の生活に戻すこと、米国に追いつけ追い越せの精神で、日本は見事な高度成長を遂げた。そして米国をも凌ぐ勢いとなり、バッシングすら受けた。しかしこれらは物質的な面での豊かさの追求でしかなかった。自然は破壊され、人の心は荒廃した。

今日、日本は従来の価値観が崩壊し、精神的な混乱期に陥っている。目に見える問題を解決するのはたやすい。目に見える「良い形」にすればよいだけだ。だが、目に見えない問題は厄介だが重要だ。目に見えないからこそ、その問題を正しく追及し、今後の日本の歩むべき方向をしっかりと考えなければならぬ。物質的な豊かさだけを追求してきた日本人はモノの存在が当たり前になってしまい、もっと大切な精神的なことを忘れてしまっている。

日本人の心を本来の日本人の魂に戻すことができなければ、いくら国が表面的な政策を行ったとしてもその改革も長期的には維持できないであろう。また親から子へ子から孫へと伝えられてきた日本人本来の

価値観や考え方も希薄になっている。本来はそれが国の力を形成し、力強い日本を作るのだ。

時代は変化する、既得の経験だけでは測れない世の中である。バブル崩壊後の日本経済の没落、長引く不況が災いして、より不安定な世の中になっている。大切なことは、今、客観的に日本を見つめなおし、本来の進むべき道、仮に道に迷ったとしても、物質的なゴールではなく最終的に辿り着くべき精神的な目標への道を掴む必要がある。

## 第一章 外から見た日本

幼稚園から小学校六年まで、私はニューヨークの自宅の近所の現地校に、たった一人の日本人として通った。様々な人種が混在する中、杉山大輔という一人人として自分のアイデンティティを形成し、人は人、自分は自分という意識を持つに至った。いつかは日本に帰国すると分っていたので、帰国後日本語で不自由しないために小学校六年の途中でニューヨーク日本人学校に転校した。現地校ではアメリカの文化を吸収し、日本人とは異なる考え方を培っていた。そして海外で生活すれば当たり前のことだが、日本を客観的に見て育った。ニューヨーク日本人学校中等部を卒業し、九五年初め、高校受験時に日本に帰国した。阪神大震災で日本中が揺れていた。

### 第一節 ニューヨークで始めた剣道

小学校三年の時にニューヨークで剣道を始めた。友人の家に行った時に、防具と竹刀が置いてあったの

で興味が湧いた。母親に剣道を始めたいと夏休みに話したら、クーラーの効いていない部屋で炊飯ジャーのカバーを一時間被っていられたらやってよいと言われた。今思えば、母は面を被ることを嫌がらないか確認がしなかったのだと思う。こうして剣道を始めることになり、車での送り迎えが必要なことから、ついでに姉妹も一緒に始めることになった。

ニューヨークでは体育館等を借りて練習をすることが多く、剣道を知らない通りすがりの米国の人が、子供が喚いているにも関わらず大人が竹刀で叩いていると勘違いし、九一一(日本の一一〇番)に通報し、警察が虐待がないか体育館に確認にくるとい一幕もあった。

剣道を始めたことによって、海外にいながらにして日本の文化や礼儀作法を学ぶことができた。私はドイツ・カナダ・米国クリーブランドの国際試合に参加し、ドイツの親善試合で優勝した。ドイツ人の多くは日本にとっても興味が有り、刀・武道・お茶・芝居について熱心に訊いてきた。だが私には彼らに語れる知識はなかった。私は日本人でありながら外から日本を眺めていたので、彼らと同様日本文化を知らず、また懂れてさえもいたのである。海外では、日本人は日本を知っていて当たり前だと思われる。英語という世界共通語を話せることや海外での体験は、日本という帰属意識の置き所があればこそ生きているのである。

中学一年次・二年次の夏休みには、千葉の勝浦の研修センターで警察が主催した少年剣道強化合宿に五泊六日で参加した。血尿が出るほどの厳しさで、ニューヨークの剣道では味わえない過酷な練習を体験し

た。

強化合宿では唯一の部外からの参加だったが、集団生活等を通して周りの人々と仲良くなることができた。その時実感したのは、米国では剣道は「スポーツ」であって、日本では剣道は「武道」だということだった。この合宿ではアメリカンスポーツでは手に入られない貴重な体験を多くした。

不思議なことだが、今では、米国で始めた剣道が、日本人である私の基礎になっている。海外剣道の活動によって、人種・国籍・言語の違いは克服できることを知った。剣道のみならず何か一つの媒体を通して人と人の関係は成り立つ。自国を理解していなければ、他の国と比べることはできない。また、自分という人間を理解していなければ他者との違いも認識できない。国際的な位置に立つ人間の考え方は、本来こうであると考ええる。このような国際感覚を備えれば、将来日本と異国の関係を、より一層深められるのではないだろうか。

## 第二節 アメリカでの教育 —日本のイメージ—

現地の学校に通っていたので、日本語を使うのは、自宅で親と話すときと、毎週土曜日に日本語の補習学校に行くときぐらいだった。姉や妹とも英語で話していた。聞く音楽や見るテレビ番組も全て英語、使用する教科書もちろんのことだが、アメリカの視点のものである。

毎朝米国歌を学校で歌い、自分はアメリカ人だという自覚を持つように教育される。一方、多民族国

家だからこそその差別を受け、自分が日本人であることを痛感する。米国の歴史の教科書等で米国が自国批判をすることは一切なく、広島の原因の悲惨な写真などは一枚も見たことがなかった。日本のことは第二次世界大戦の時に真珠湾に奇襲攻撃をしかけた国だと記されていた。その歴史の授業ではとても気まずい雰囲気になり、担任の先生がフォローする場面もあった。

日本人としての意識はあるものの、その頃の私は日本を好きになることができなかつた。これはアメリカが日本をどのように見てきていたのか、どう教えていたのか、彼らの使う教材や教育方針の影響が大きかつたことによるのだと、帰国後高校時代に知ることになった。

高校二年の時に古文の授業を通して日本の文化を知り、また大学受験で世界史を学ぶことにより、今まで勉強してきた「外から見た日本」の教育と「内から見た日本」の描かれ方が違うことに気づいた。修学旅行の時に広島を訪れ、原爆ドームや原爆投下直後の写真や遺品を目の当たりにして、私はアメリカは自分の国を一番にするためには歴史の真実をも改竄するのだと知った。

日本に帰国してから来年で一〇年を迎える。この一〇年間で、日本の国際的な立場も国内の状況も、帰国した当時とは全く異なってしまった。また逆にこの一〇年、日本からアメリカを見ていて、いかにアメリカが自己中心的な立場で国際社会に対して誤ったことを行っているかに気づいたのである。

今、小泉政権はアメリカに追随する形になっている。しかし、これが本来の日本の進むべき方向なのだ

ろうか？私は意識して両国（日本・アメリカ）を比べられる年齢で日本に帰国したからこそ、日本のよさやアメリカの欠点を知ることができたと感じる。では二一世紀のわが国にはどのようなかたちが望まれているのだろうか。

一月に大統領選挙を控えているが、ブッシュは強いアメリカを誇示している。アメリカでは子供たちはアメリカが一番だと洗脳されて育つ。そして誰もそれを疑わない。しかしアメリカを代表するブッシュ、ラムズフェルド、チェイニー、彼等の言動を観察すると、日本の本来持つべきスタンスと大きく掛け離れた点があると思う。

アメリカが昨年はじめたイラク戦争だが、アメリカは強引に自国の考え方を他の国に押し付ける傾向がある。顕著なのが第二次世界大戦後の日本に対する戦後処理である。マッカーサーが日本人に与えた、心理的・精神的・物理的な影響はすさまじかった。日本は四年間アメリカと戦争をしており、精神的な「和」の繋がりで戦うことができた。しかし今の日本は戦前の日本と民族性までもが変わってしまった。

アメリカに植えつけられた物質中心主義によって、日本は世界的に稀にみる経済上の成功を収めはしたが、国も、社会も、個々の人間も、金銭や物質的豊かさを追及する以外に目標を見出すことができないでいる。混迷する社会にあつて、周りに左右されない自身の考えや理念を、自信をもって貫くために、一人一人が自覚をもって自らの人生を歩まなければならない。

国家は他の国家の真似をして成り立つものではない。歴史が違う、民族性が違う、心が違う。過ごしてきた時間と背景が違うのである。それは幸せの尺度も違うことを意味する。日本が日本らしくあるために

どうすればよいのかを次章で考える。

## 第二章 文化継承の重要性

昨年ハリウッドが制作した「ラストサムライ」は日本人の共感を得た。また数年前にもハリウッド制作の「パールハーバー」が上映され、日本国内でもヒットした。なぜこのように日本人は、西洋人が創る「日本の姿」には簡単に共感するのに、実際に身近に存在し続けている日本の伝統文化や自分自身の中にいる「サムライ」に自ら気づかないのだろうか？

### 第一節 日本文化

「外から日本」を見てみると、日本には西洋文化にはない特徴的で趣のある姿があることに気づく。二一世紀における日本の形を考えた時、日本文化即ち、自分自身を正確に知ることが基本であると私は考える。文化とは国語大辞典では左記のように定義づけられている。

自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの<sup>1)</sup>。

日本国民が日本という国を知ることから全ては始まる。自分とは誰か、日本とはどんな国かという必須

質問を、いかに考えるかという姿勢が大切である。

日本文化を子供に自信をもって語り伝えるためにはまず自分自身がよく学びよく遊ぶ、つまり知って実践することが肝要です。文化を肉体化することではじめて、いろいろ多くの人間の努力で形成されてきた日本文化というものを個人としての自分がどうとらえるか、どう反応するかが見通せるようになる。あたりを見回せば私達の周囲には日常的に奥の深い文化が数え切れずあるのだから。そして固有の文化がいたるところに身近にあるということが、われわれは高い独自の文化を持っているということになるのです。そういう幸せに気づかないで日本人として過ごす人生なんぞ砂を噛みしめるようなものだと思う<sup>2</sup>。

石原氏も右記のように述べているように、日本人は自らの文化のすばらしさに気づくべきだ。私はアメリカと日本で生活し、それぞれの国が教科書に載せる歴史的出来事の捉え方がまるで違うことに気づいた。前述したが、自分の国と他の国を比べるためにはまず自分の国を知らなければならぬ。日本のどの点が優れているのか、またどの点が劣っているかによって客観的に自国を知ることができる。過去の歴史ではもはや変えられないことも、新しい歴史作りの際には同じ過ちを繰り返さないように心がけることができ、また過去の出来事を学ぶことによって再びの過ちを避けることもできる。

先月テレビで終戦記念日の特集が放映されたときに、街頭インタビューでアナウンサーが「八月十五日は何の日ですか？」と若者に尋ねると満足の行く答えは出て来ず、「俺の誕生日だ」という答えが返ってきた。この若者は、親に自分の生まれた日付が終戦記念日だとすら教えられていなかったのだろうか？また終戦記念日も知らないなどということは勉強不足であり、日本の歴史について学校も親もほとんど教えていない、あるいは教わる側に教わる意識がまるでないことを物語っている。

このように子供たちは、日本の歴史を日本人の視点から教わっていないから何も知らないのだ。また知らなくても生きていけるのが今の日本だということになる。受験のために日本史を勉強しても、得点が取れればそれでよいと考え、本当の意味での勉強になっていない。日本の歴史を知らなければ自分に自信をもてないし、歴史を知らないから世の中をよくも悪くも考えることができない。

## 第二節 本来の日本人の姿を求めて

私はアメリカで生活したからこそ、日本人が日本人としての自覚を持ち、日本人としてのアイデンティティが形成された上で西洋文化を取り入れるようにするのが最善の方法だと知ることができた。

日本は高度成長期から追いつけ、追い越せの精神で邁進してきた。日本は経済的にも世界トップクラスになった。団塊の世代が退職し、少子高齢化になりつつある今、明確なビジョンを持ち、国力をつけるに適切な姿勢を持つ人間が多ければ、人口は少なくとも、日本の未来は明るくなるだろう。ここで大切な

は「間違つた方向に国を進ませない」ということである。

自分を知り、初めて他の人と比べることができると私は考える。国もまた同じである。日本はどのようなのかを全国民が知らなければならず、今まず第一に、日本人としての自覚を持つような教育をしなければならぬ。

### 第三章 日本人のアイデンティティ

#### 第一節 元気がない日本人

戦争で負けたことが日本人本来の精神的な豊かさを失わせた。だが、渋谷・新宿・秋葉原の電気街を見れば日本が経済的に成り立っていることがよくわかる。物質的には裕福にはなつたが精神的には乾いている。敗戦を経験した世代の人たちはその後の「日本」をどのように捉え、またそこからどう自分の子供たちに接し、前に進むことができたのだろうか。左記は、大塚いわお氏が現在の小学校における無気力な少年達の原因となっている現代の家族の役割について触れた論の抜粋である。

無気力な青少年たちの親は団塊の世代の前後に当たり、団塊の世代が育てた子どもに無気力症状が多い。原理原則に則って行動できない、いわゆるマニュアル人間、指示待ち人間が多い。団塊の世代を育てた親の世代は、日本が戦争に負けたときに価値観を喪失してしまった人たちで、自分はきちんとした生きかたをしているけれども、子どもには自分の価値観を押しつけず、信念をもって人間として

のモラル、礼儀作法を教えなかった。あるいは教えようとしても子どものほうが「そんな古臭い考えは聞きたくない」と聞く耳を持たなかった。そういう親子の断絶があった世代です。非常に運命的なものだと思いますが、結局、日本中が戦争直後に自信を失ってしまい、それまでの価値観が全部揺らいで、確かなものがなくなってしまった。特殊なイデオロギーは教えてはいけないと自戒する思いが昂じて、人間として最低限身につけるべき人格やモラルさえも教えてはいけないような雰囲気があったように思います。その連鎖が親から子へ、子から孫へと続いている。それが今日の日本の不幸ではないかと感じられます<sup>3</sup>。

大塚氏が述べるように、団塊の世代を育てた世代は、日本が戦争に負けたときにそれまでの価値観を喪失してしまった人たちである。このような日本人としての「価値観」をも奪ってしまった戦争は、アメリカが描いた「物質的裕福さ」を彼らの生きる目標の第一に置かせてしまったのだ。即ち第二次世界大戦は日本人として持つべき伝統的な価値観や考え方が次の世代に継承されないきっかけとなってしまったのである。

今、日本は混沌の時代に入り、先行きも不透明である。自発的な主張をし、説得力を持つ日本人が少なくなつた理由のひとつに敗戦がある。

自分をわからない人間は、自ら考えて行動をすることができず、予想不可能な状況に陥ったときに臨機応変に対応することができない。日本は今まで終身雇用・年功序列・良い大学を卒業すれば良い企業に入

社できるといふ安心が確保しやすい社会であった。しかし戦後から今までの神話が崩壊したことにより、日本人が日本人として、個人が個人として、それをしっかりと認識しなければならぬ時代になっている。

## 第二節 日本人としてのアイデンティティ

グローバル化社会になったことにより、情報伝達のスピードや国境もボーダーレスになってきている。国際社会で活躍する多くの日本人を客観的に見た時、自分が何をするためにその場所にいるのかを認識している人が多い。日本を飛び出して自分の力を確かめる日本のスポーツ選手、海外留学を通し、自身のスキルアップを考えるビジネスマン、文化や芸術を肌で感じるために学びに行く学生など。自分を知ることが成長への飛躍となる。日本は今まで集団行動や右向け右の一斉授業方式で教育を行っていたが、少子化に伴い、個別指導や個人個人に見合った教育が重視されるようになった。企業も商品を開発する際には様々なマーケティング活動を行い、十人十色の趣味や傾向を分析し、適した商品開発を行うようになってきた。人気グループのS.M.A.P.が歌っている「世界に一つだけの花」が現在の日本でヒットする社会現象は、一番ではなくオンリーワンの存在になることに共感を得ている人々が多いことを示している。

一〇〇年前の日本と今の日本は違う。外的な要因による環境変化があり、時代の流れについていくことが重要視されてきた。しかし今、日本人は一度立ち止まり日本人として、個人としてのアイデンティティを確立し直さなければならない。

ニューヨークにはアメリカ人以外の様々な国籍の人々がいた。人種のサラダボールと言われるだけあつ

て、トラブルや意見のぶつかり合いが多かった。海外で生活している日本人以外の人々はアメリカで生活をしている時も、自分の国にプライドを持ち、自国が馬鹿にされると自分のことのように怒ることがしばしばあった。

アメリカの小学校で私はあまり米国家を歌うことに抵抗がなく、特に意識もしなかったが、起立をして歌わなければならない時に絶対に立たない友人もいた。また現地の学校では子供の誕生日にその子自身の母親がクラスメート全員にカップケーキなどを持参して配り、みんなで祝うことがしばしばある。その時でも「ごめんね、僕は食べちゃいけないんだ」と謝罪する子がいた。担任の先生は「宗教上のことだから気にしないでいいわよ」と言った。共存しながらも自分の主義や信念を強固に守る姿に何度も出会った。ニューヨークで生活していたことで、このような場面に何度も遭遇することができたと思う。自分の考え、自分の国や宗教へのこだわりや主義というものを一人一人がしっかりと持っていることがはっきり分かった。

日本は単一民族だが近年、殊に東京には多くの外国人が住むようになった。グローバル化社会の今、国をその位置や境界で判断することはあまり意味を持たなくなってきたように思う。個人として日本人としてのプライドや信念を持つことにより「自分」が確立し、他の国の考え方や価値観の違いを認識することもできる。自分と他者の違いを識別することができない人間が多いことが、今の日本人のよくない傾向だと言えよう。

二一世紀においてあるべきわが国の形を考えると、グローバルな社会であるからこそ、日本という

帰属意識の置き所をしっかりと持つことで個人のだれもが生きてくるということを重視すべきではないだろうか。

### 第三節 アイデンティティクライシス

一般的にアイデンティティの崩壊すなわち、心理学でいうところの自我同一性拡散とは、左記のように定義づけられている。<sup>4</sup>

自我同一性拡散感とは、時間的・空間的な自己の連続性、一貫性、独立性、不変性などの感覚がもてないという意識のことである。

中西信男他著『アイデンティティの心理』の論の中には、続けて左記のようにも述べられている。

未熟型は自我の面も未確立なため、自分としてのまとまりの感覚が持てず、拡散感が大きくなる。

これに対し、成熟型は自我確立も社会性確立もほぼ達成しているために、自分としてのまとまりがあり、拡散感が小さい。

次に、自我型が社会型より拡散感が大きいということについて考えてみよう。拡散感を意識するのは、時間的な自己の連続性や一貫性がもてないときである。人は何かを基準にして、自分の一貫性を

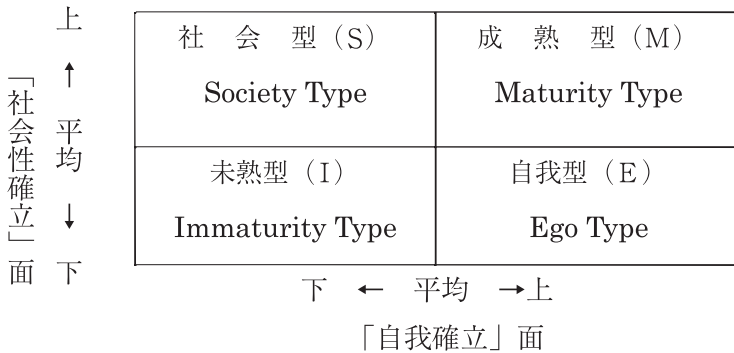


図1 自我同一性尺度による4型の分類<sup>5)</sup>

感じる。その枠組として社会があり、社会とのかかわりの中で自分を位置づけることができたとき、同一性の拡散感が小さくなる。全体の同一性得点がほぼ等しいにもかかわらず、自我型のほうが、社会型よりも拡散感が大きいのは、自分を位置づける外的な枠組が欠けているためであろう。

社会から遊離し、自分の内的世界だけが拡大してしまうと、しだいに自分自身がわからなくなり、自己像があいまいになってくる。社会という大きな枠組との関係を自分なりに納得のいく形にとらえることが、同一性形成過程で非常に重要なことなのである。青年期はともすれば関心が自分の内面に向きやすい時期である。社会とのかかわりを真剣に考えることが、自分という人間を統合された人間にしていくために大きな意味をもつことを、もつと理解する必要がある。

ここでは、上記の図1のように、同一性確立の程度を、自我確立と社会性確立の面から捉えて、四つの型に分けている。このように、自我と社会性の確立は両方が高ければ、バランスよくその人格を成熟の

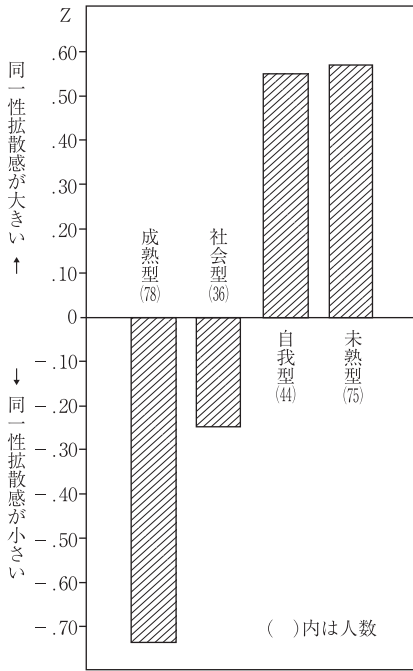


図2 同一性の型による同一性拡散感得点の比較

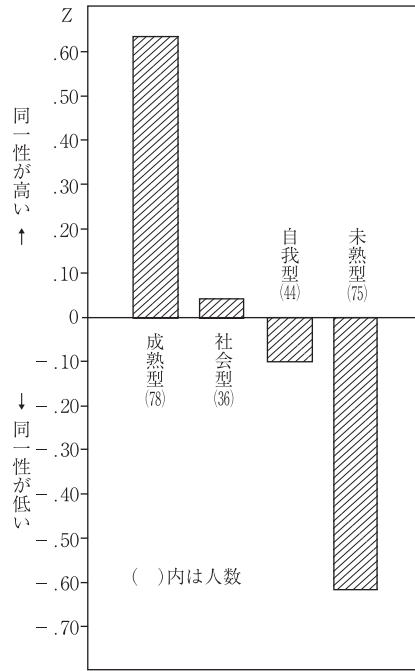


図3 同一性の型による同一性簡易尺度得点の比較

方向へと導く。すなわち、ここでのテーマである「これからの日本のあるべき形」に役立つ人材になりうるということにもなる。参考までにこれらの関係を示すと上図のようになる。(図2・図3)<sup>6</sup>

ここに見えるように、同一性拡散感が小さいほど成熟型が多く、社会型も多い。自我同一性の獲得と人間の成熟度や社会性のあり方には緊密な関係があることがわかる。

#### 第四章 日本の進むべき道 — 結論 —

第二章までに考えたように、私にとつては、アメリカや日本での学校や剣道から与えられた教育が、自分の中の、個人としてまた日本人としてのアイデンティティの形成に重要であったことがわかる。そして、そこから浮かぶのは、学校教育においても、家庭教育を含む学校教育においても、人間を育成する根本となるのは、「自分を知ること」「自分の背景を考えること」に関わる教育であるという点だ。そしてこれらは、これからの日本社会の形成にも当然要求されると考えられる。

整理してみよう。これからの日本に有用な人物像をまとめると左記のようになると考える。

社会の変化についていける、自発的で自立した「自分でものを考えられる」人間

全ての幸せのために、自分で問題点を発見してその解決に至る方法やプロセスを自身で判断して動ける、自発的、意欲的な人間

このような「人間」の育成に最も必要なことは、人間存在のベースであるところの、「自己確立」「自我

同一性の確立」である。そしてまたこれは、「日本国」の育成にも当てはまる。「日本の国家としての自己確立」「日本人としての自我同一性の確立」が必要であることをも示しているのではないだろうか。

つい昨日、左記のような記事が目にとまった。

### △自殺率▽日本が先進国でトップに WHO調査

【ジュネーブ大木俊治】日本の自殺者数が人口一〇万人あたりの比率に換算すると世界第一〇位で、旧ソ連・東欧圏を除く主要先進国の中では最も多いことが八日、世界保健機関（WHO）の調べでわかった。九九年の前回調査では、日本は一六・八人（九六年）で三位だったが、今回は特に四五〜六四歳の中高年男子の自殺者数が急増した。また、世界全体の自殺者数は推計で年間約一〇〇万人に達し、「殺人や戦争の死者の総計を上回る」と指摘している。

調査は、データが入手可能な九九カ国を対象に直近の数字を比較した。日本は〇〇年で、自殺者総数三万二五一人だった。

それによると、人口一〇万人あたりの「自殺率」が最も多いのはリトアニア（四四・七人、〇二年）で第二位がロシア（三八・七人、〇二年）。日本は二四・一人（男三五・二人、女二三・四人）で一番目。主要先進国では米国一〇・四人（〇〇年）、英国七・五人（九九年）、フランス一七・五人（九

九年)、ドイツ三・五人(〇一年)など。

調査にあたったWHO精神保健局は、日本の自殺急増について「十分な分析はできていないが、不況による仕事でのストレスの増加が大きな理由のようだ。また、日本の場合『腹切り』の伝統があるように、自殺に寛容な文化的土壌もあるのではないか」と話している。

(毎日新聞) 二〇〇四年九月九日

これで見ると日本は人口一〇万人あたりの自殺者の比率が世界で一〇番目に高く、旧ソ連東欧を除く主要先進国の中では最も高いことがわかる。また、今回特に四五歳～六四歳の中高年男性の自殺者が急増している。これは非常に深刻な社会現象が進んでいることを示していると思う。日本の中枢を担う人々のアイデンティティクライシスが急速に蔓延しつつある。それがはつきりとした数字に表れているのである。

また問題は日本だけではない。その傾向は数字で見る限り、世界全体に広がりつつあり、自殺者の総数は年間約一〇〇万人を越える勢いで増えており、「殺人や戦争の死者」をすら上回る。これは世界的にも、自己の存在意義を見出せない人々が、また自らの幸せをどこにも見つけられない人々が、増えていることを表しているのである。

日本が世界で、そのリーダー的立場を保つ時代は果たしてもう終わったのであろうか。私はそうは考えない。物質的な意味でのいわゆるアメリカ型の唯物主義的なリーダーではなく、人の心のあり方や世界人

類の心の基盤のありかを示す、目指す、そういう目に見えないものの価値を大切にすると人々のリーダーとして、未来の日本のあるべき形はすでにはつきりしていると私は考えるのである。

- 1 日本国語大辞典（新装版）小学館 一九八八年
- 2 石原慎太郎 『「父」なくして国立たず』 光文社一九九七年
- 3 大塚いわお 「教育における父性の役割」 平成二年四月（学士会 夕食会講演）
- 4 中西信男・水野正憲・古市裕一・佐方哲彦著 『アイデンティティの心理』 有斐閣選書 一九八五年
- 5 中西信男・水野正憲・古市裕一・佐方哲彦著 『アイデンティティの心理』 有斐閣選書 一九八五年
- 6 中西信男・水野正憲・古市裕一・佐方哲彦著 『アイデンティティの心理』 有斐閣選書 一九八五年